

# 山鹿の春

エッセー すまひさよし 須磨久善 写真 おおいでかずひろ 大出一博



年の初めは元旦と決まっているが、季節ならば早春の兆しを感じた時が一年の始まりに違いない。

早春の兆しといえば、やはり梅の蕾の綻びを目にした時だろう。

冬枯れの木立の中にわずかな赤や白の斑点を見つけて歩み寄ると、仄かに甘い香りが漂う。梅の蕾を見つめながら、思わず「春だね」とつぶやいて顔がほころぶ。

先日、熊本の山鹿市に講演に出かけた。山鹿市は加藤清正が治世した時代から栄えた伝統ある湯の町で、灯籠やうちわの名品の生産地として知られる。

講演の場は国の重要文化財に指定されている八千代座で、明治43年に開設されて以来100年余りの歴史の中で数々の高名な歌舞伎役者が訪れた由緒ある舞台である。

講演の対象は山鹿市内の6つの中学校から集まった2年生436人。私が医師になろうと決めた年と同じだった。

私は皆にゼロから一を生み出す「発想する心」と、志を貫くための「挑む力」を育んで深く生きてほしいと伝えた。そして、大人になった時になぜ自分がこの仕事を選んだのか、その原点を見つめなおす自問自答を忘れないでほしいと語った。

私を見つめる眼差しの中に、多種多様な輝きを見た。驚き、好奇心、納得、決意。

それぞれの瞳の中に梅の蕾の綻びを感じた。

赤、白、黄色、好きな色に自分を染めて、いい香りの花を咲かせてほしいと心から願った。

梅の花言葉は高潔。まさに深い人生の象徴なのだ。

これから彼らの人生の春が始まる。

咲き乱れる紅梅に囲まれて、あでやかな着物に身を包んで物思う彼女。14歳の頃には何を夢見ていたのか。

